

2017年9月15日



第69号

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

百姓百生

その62

熱帯雨林から来た

パボロさん

HYAKUSHO-HYAKUSHO. HYAKUSHO-HYAKUSHO.

今なお鬱蒼^{うっそう}とした原生の熱帯雨林が残るパプアニューギニアでは、その森が次々に伐採されて、オイルパーム（油やし）プランテーションに変わっています。

パプアニューギニアから来日したポール・パボロさん（45歳）は、京都の宿泊先の近くで大きなビルを壊して立て替えている現場を見て、自国の森の多くの木がコンクリートパネルとしてこのように使われているのかと、悲しい思いで見つめました。日本人は自分の国の森はよく保護しているのに、私たちの森の木は使い捨てにしているのはどうしてかと、私たちに問います。

ポールさんは、ニューギニア本島の東部にあるニューブリテン島の原生林に囲まれたムー村に生まれ育ち、村人の先頭に立って森を守る運動を続けてきました。日本の市民団体「パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会」の招きで6月24日に来日し、東京、大阪、広島など日本各地の大学などで講演し、市民と交流して7月10日に帰国しました。当初は、帰国は7月15日の予定で、帰国前の14・15日に地球的課題の実験村を訪問して交流する予定でしたが、ご家族の事情で急遽予定を早めて帰国することとなり、残念なが

ら実験村との交流は実現しませんでした。

現地では、2008年に政府土地省の役人と仲介者なる者が来て、村の周辺地域42,400ヘクタールをでっち上げの地主会社に99年間リースするという契約を、住民のサインを偽造した上に住民には秘密裏^{ひみつり}に結びました。その契約を基に、2009年に森林省はマレーシア系の巨大伐採会社リンブナン・ヒジャウ社に森の皆伐権^{かいぼつ}を与え、丸太輸出と伐採後の跡地にオイルパームを植える事を許可しました。こうして、2010年4月から森の伐採が始まりました。

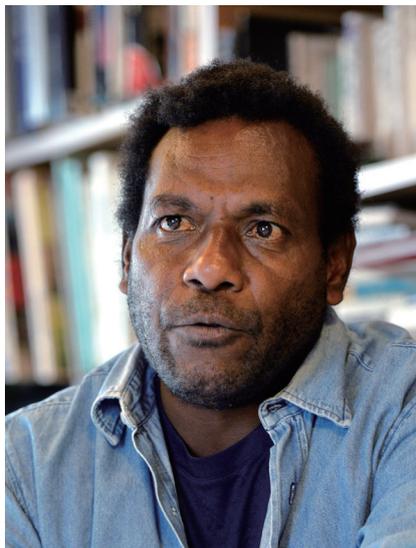
これに対して、住民は道路封鎖をしたり、不法契約を訴えて政府各機関を回ったりした後に裁判に訴え、2014年11月に裁判で操業一時差し止めの判決を勝ち取ったのです。ところが、伐採会社は首都ポートモレスビーで別の裁判を起こして、操業再開の判決を得て、現在は双方が裁判を継続しているところです。

現在パプアニューギニアからの原木は主に中国に輸出され、コンクリートパネルなどの合板に加工されてから日本に輸入されています。私たちの生活が、

熱帯材を大量に浪費し、現地の人々の生活を破壊し、貴重な原生林を消失させているのです。

ポールさんは最後の講演を終える時に、「私は日本の多くの方が私たちの活動を支援して下さることを知ってとても感謝しています。私は決して賄賂^{わいろ}は受け取らない事を約束します。子供たちに豊かな森を残せるまで闘いを止めません」と力強く語ったのでした。

倉川秀明



写真提供：朝日新聞社

【2017年 年次寄合の報告】

たくさんの課題、たくさんの語らい、 実験村らしい盛りだくさんの寄合でした

今年の4月9日（日曜）の三里塚は、朝からどんよりと曇り、いつ雨が降り出しても不思議ではない空模様だったこともあって、会場が夕立の森から急きょ木の根ペンションに変更することになりました。

そんな天気でも、当日は村民たちの元気な顔がそろいました。実験村の課題はいろいろありますが、いま最も急を要するのは、村民の高齢化（？）の影響もあってか、年々野良仕事への参加者が減少する「麦・大豆畑トラスト」について、コンセプトの再構築を含めた意見交換や検討をはじめることでした。イベント的企画を立てて参加者を増やしては・・・等々、意見は多様でしたが即効薬的な解決法がないのは当然で、担当の金森さんを中心に、いろんなことを試しながら「自分の食料は自分で作る」といった、発足当初のコンセプトにとどまらないトラストの意義を模索していきたいと思います。

また昨年からは、いわゆる「新滑走路」問題が周辺地域で取りざたされ、実験村（相談会有志）としても、それに対する意思表示を行ってきたこと、あるいは周辺地区での説明会では地域の人々の思いが必ずしも「新滑走路」推進ではないことも明らかになってきています。わたしたちとしては、円卓会議に提起され、実験村の礎いしづえともなった「児孫じそんのために自由を律す」と題した文書に盛り込まれた「農的価値」などの価値観をさらに発展させながら、これからもこの問題に向き合っていきたいと思います。

年次寄合の特別公演は、JVC（日本ボランティアセンター）代表の谷山たにやまさんにしていただきました。谷山さんは、「駆けつけ警

護」なる新任務を付与された自衛隊がPKO部隊として派遣されている南スーダンの現状を、現地の写真を示しながら生々しく報告し、そのうえで日本がめざすべき非軍事的な国際貢献という問題提起をして下さったと思います。（講演の要旨は4頁に掲載しましたので参照して下さい）。

最後に、今年の年次寄合の報告がすっかり遅れてしまったことを村民の皆さんにお詫びするとともに、来年の年次寄合では、元気な村民のみなさまの顔がひとつでも多く見られることを願って、年次寄合のご報告といたします。

（事務局・佐々木希一）



<麦・大豆畑トラスト>

コンセプトの再構築へ

麦については、今年も草に負けてしまい収穫できませんでした。大豆については、7月7日に種まきをしました。鳩がたくさん来訪していたためあわててカカシをたてました。早めの対応が功を奏したのか、発芽はまずまずでしたが現在は虫が葉っぱをかじっています。。

今年は大豆と麦を同時に同じ畑でやるのではなく、畑を半分ずつにして別々に栽培してみることにしました。理由としては、毎年大豆がまだ畑にあるうちに麦の種まきをしているのですが、ここ数年は麦をまくころにはすでに麦に似た雑草が生えていて麦が負けてしまうからです。

麦・大豆畑トラストにはいろいろなコンセプトがあり、そのなかのひとつに「自分たちの食べ物を自分たちでつくる」というのがあったと僕はきいています。しかし、昨今では畑作業に参加してくれる方も減ってきてしまいました。ここらで一度、麦・大豆畑トラストの方向性やありかたについて考え直してみても、と思っています。

みなさんのご意見をぜひおきかせください。
(担当：金森)



<食のネットワーク>

今年の実験村がホスト役 —AFECの年次寄合い—

実験村は多様なネットワークを国内、国際間で作り上げてきました。基本的にはそれを継続充実させていく方向で、これからを考えています。

◆アジア農民交流センター（AFEC）

成田寄り合いと東北タイを訪ねる旅

今年度最大のイベントは、AFECとのつながりです。11月11日（土）、恒例の年次寄り合いを成田で行います。近辺のホテルで寄り合いを行い、三里塚のいま、新滑走路問題、村民の石井さんが始めた自給農園の話などで盛り上がり、翌10日から有志で、実験村の仲間のバムルン・カヨタさんを訪ねて東北タイに出発します。帰国は19日の予定。

AFECの年次寄り合いは前回は神奈川、その前が群馬・上野村—秩父、その前が山形・置賜、さらにその前が新潟と回を重ねており、今年も実験村はホスト役として楽しいものにしたいと思います。詳しい内容は追って連絡します。

◆国際有機農業映画祭

初回から実験村が協賛し、参加しているイベントです。今年12月3日（日）午前午後通して御茶ノ水の「全電通労働会館」で行います。詳しくは7ページで紹介しています。

◆脱グローバルゼーション運動

TPPはトランプ米政権の離脱で“死に体”となっていますが、日本とEU、アジア太平洋諸国による自由貿易圏ESEPへの動きなど次々と新しい課題が出てきています。「TPPに反対する人々の運動」と協働し、脱グローバルゼーション運動に参加します。

(担当：大野和興)

日本は非軍事に徹した平和貢献を 自衛隊への新任務付与を批判する

日本国際ボランティアセンター代表 たにやまひろし 谷山博史さんの講演

政府は2016年11月15日、南スーダンに派遣している自衛隊PKO施設部隊に駆けつけ警護を新任務として付与する閣議決定を行った。前年9月、多くの国民が反対し、憲法学者の大半が憲法違反であると批判する中で強行された「安保法制」改悪の初の運用となった。12月には新任務の訓練を受けた部隊が派遣されたが、政府は国会の内外での現地情勢はPKO派遣5原則の「紛争当事者間で停戦合意が成立している」の条件を満たしていないではないかとの批判に耐えられず、「PKO部隊は施設活動に一定の区切りがついた」として5月末までに撤収する方針を示した。(順次帰国し5月30日に活動を終了)

長いこと紛争地での人道支援・平和構築に携わってきたJVC（日本国際ボランティアセンター）代表の谷山博史さんは「これで終わりではありません。新任務付与は裁判でいえば第1号事件。この判例が定着し、なし崩し的に安保法制の運用が進められる危険がある」と指摘しました。以下は4月9日実験村の年次寄り合いでの谷山さんのお話の要点。

JVCは2005年10月から旧スーダンでの村づくりや平和構築の支援をしてきた。2011年に南スーダンは国民投票によりスーダンからの独立を果たしたが、13年12月に政権内のキール大統領とマシャール副大統領間の対立で内戦となった。15年に両派は和平合意し、これに基づきマシャール元副大統領が首都ジュバに戻り連合政府に合流する矢先、昨年7月の戦闘が起きた。9月にJVC職員が現地調査したところ政府軍は戦車、戦闘用ヘリ、マシャール派は高射砲を使うなど、総力戦だった。日本政府はこの戦闘を「発砲事案」と矮小化^{わいしょう}し停戦合意は存続しているかのようにいったが、駆けつけ警護任務を付与した自衛隊を送り込む

ための強弁だった。

アフガニスタンなど紛争地での経験から言うと、武器を使用した警護救援はかえって救出しようとする人々の危険を高める。また群衆に取り囲まれた人を救出しようと警告射撃をすると、群衆は暴徒と化すのでかえって危険。さらに、かりに政府軍を相手とせざるを得ない場合、交戦という事態になり、憲法の制約を逸脱する。南スーダンではこの確率が高い。

日本のやるべきことは非軍事に徹した平和貢献。南スーダンでは民族対立も絡む内戦が続き、240万人以上の難民・国内避難民がいる。食糧不足が深刻なうえ大量虐殺の危機も孕む。日本はキール派ともマシャール派ともパイプがあり、東アフリカ諸国とも関係は良好。これらを生かして対話プロセスの仲介をすることが求められる。これまで「武力によって紛争を解決しない」日本独自の立場は信頼を得てきた。その上に立った日本だからできる平和貢献をしていかななくてはならない。

(文責 平野靖識)



木の根ペンションを通して築かれる 新しいカタチ

木の根ペンションもプールの泥掻き^{どろか}を始めてから7年の月日が経過し、年々活気を増しており、同時にイベントをきっかけに、この地域の歴史に興味を持ち春休みや夏休みを機に学生や外国人が各所に訪れる機会が増えてきました。

今回7月15・16日に開催されたイベント名は【タイガー&ドラゴン】。テクノ系やハウス系のDJを中心とした野外イベントで、地元若手農家とペンション住人、そしてその友人が都内で経営するバーとの共同開催となりました。

今回のイベントで印象的だったのは参加した著名なアーティスト達がこの場所の存在と歴史に興味を持ち、またその価値と重要性に共感してくれた事でした。

さらに木の根のイベント活動に興味を抱いた山武市^{さんむ}で林業を営んでいる友人や、神崎町^{こうざき}を中心に竹林の整美と竹を使ったアートに取り組んでいる友人も参加し、地元材料を使ったボタニカルで盛大なステージを作る事ができました。都市部と地元の人々の合流の中で組み上げられた巨大なステージは、未来を感じさせる空間のように感じた参加者もいたようです。

このイベントは都市の若者と農村の若者、双方にとって非常に大きな刺激となった様子で、開催中に既に来年の話で盛り上がっていました。なおフェイスブックやツイッターなどSNS上でも話題になっており、様々な活発な意見が交わされております。



(大森武徳)

ランガリライさんの訪問

5月6日(土)にジンバブエ出身のランガ・リライさん(29歳)と同志社大学の峯陽^{みねよういち}一さんが成田に来訪されました。ランガは、3年前に来日され、おととしインドでの自動車事故で亡くなられた農業研究者サム・モヨさんの後継者です。年4月から同志社大学に留学中で、2児の父でもあるそうです。日本の農業組合や市場に関心があるということでの訪問でした。



まず、ワンパック出荷場で三里塚物産の平野さんと私と4人で顔合わせをし、その後、石井恒司さんの自給農園ミルパに場所をかえて、伊藤文美さんほかミルパのスタッフも加わって、クルミの木の下で取れたてのカモミールティーを飲みながら、日が暮れるまでジンバブエと日本のそれぞれの農業事情を話しました。

ランガさんはジンバブエで行われた土地改革が戦後日本の農地改革と重なる、参考にしたい、農業を基本に据えた発展が大事だと熱く語りました。「種子法」や「遺伝子組み替え」農産物についてのまじめな話から、ジンバブエの主食の「ザザ」の作り方まで話の内容は多岐にわたり密度の濃い時間を過ごしました。

翌日は山武市^{さんむ}で田植えをします、と次の場所へ行かれたランガさん。農業体験などのフィールドワークをしながらジンバブエの農業の未来を見据えるランガさんの今後の研究活動に注目していきたいと思います。

(上野香)

酒の話しは… やはり飲んでみる

いつの頃からか実験村の相談会では、一段落すると日本酒を嗜むようになった。私の持ち込んだ酒である。いつも秋田の酒なので事務局長が、なぜ秋田なのか、なにか強い拘りがあるのか、その辺を書いてくれないか、ということになった。私としてはそんな深いものはないが、キッカケを少し書いてみよう。

1988～89年頃、秋田に帰省した際、「^{むみょうしゃ}無明舎」が出版した『秋田ほんものの暮し』だったかな？ の中で、酒の小売店3店が「自分たちが売りたいと思う酒が秋田にない」ということ。原料米から仕込みに至るまで、提携した蔵元と納得のいくまで協議し、仕込んだ清酒。この酒を携えて酒蔵と小売店がともに秋田の酒のレベルアップを目指そうという話。

それが、刈穂 昔生^{きもと}酏 純米酒「出羽の雫^{しずく}」という酒。村民の何人かはだいぶ前に飲んだことがある。その説明書をちょっと引用する。

—

大正の終りから昭和の始めにかけて、秋田では史上最良の清酒が造られていた時代だといわれます。全国の清酒品評会で「両関」が優等賞を受賞し、酒どころ・秋田が脚光を浴びて、かつてないほどの熱気に包まれていたといえます。

当時は、醸造用アルコールや醸造用糖類などといったものはなく、すべてが「純米酒」。いや純米酒という呼び方さえありませんでした。

「出羽の雫」は、現在できうる技術と仕込み道具を使い、その当時の造りを今に再現したもので『秋田の酒の原点』を求めたものです。…

…ノスタルジーではなく、今に生きる『酒』を皆さんとともに育てていきたいと考えています。

—

深く物事を考えない私は飲んでみるかと思い、それが今に続いているにすぎない。

どんな酒を飲むかはその人の自由。秋田の酒の質は向上している。まずは相談会で確かめますか。

こむずかしい話はなしにして、ゆったりとした心で飲んでみる。飲み出すといろいろ話が出てくるだろう。旬の野菜を使^さつての肴、トラストの作物の利用法、老朽化した身体（私）の生かし方、名案が出なくてもヒントは出てくるかもしれない。やってみることでですね。

(小松巳規男)



メーカーのホームページから

～村民になってください～

実験村は、いまの社会のありようと、私たち自身のくらしを足元から問い直そうという試みです。国際空港という巨大開発に抗し続けてきた三里塚の地を拠点に、人々と結びあいながら水を、土を、森を、人を大切にする“もうひとつの里”づくりをめざします。あなたもぜひ、村民になってください。

- 村民費 3000円
 - 麦大豆畑トラスト 5000円
 - 通信購読のみ 1000円
- 郵便振替

00140-3-92555

地球的課題の実験村

<問い合わせ>

電話/FAX

0476(26)1654 平野

メール:

jikken-mura@jcom.home.ne.jp

URL:

<http://yamasoft.jp/jikken-mura/>

11回目を迎えた国際有機農業映画祭

大野和興（国際有機農業映画祭運営委員）

仲間とともに国際有機農業映画祭を始めて10回を数えた。毎年1回東京で開催、やがて全国各地で自主的なサークルや実行委員会が立ち上がり、地域版が開催されるようになった。この10年、農業はとてつもなく難儀な時代だった。世界のすべてを市場競争に任せるグローバリゼーションが吹き荒れるなかで、農民の農業は淘汰され、農民は土地から剥ぎ取られていった。その難儀さは年々深まっている。有機農業とは何だろう、そのことを考え込む10年でもあった。

◆工場生産化する農業

農業近代化が国是となった1960年代、国の農業近代化の柱は「機械化」「化学化」「施設化」だった。いま農業政策が最大の目玉としてあげているのは「IT化」「生命操作」「工場化」である。農業生産対策費のほとんどがここにつぎ込まれている。IT化とは人工知能化・ロボット化と言い換えてよい。農協を壊し、小さい農家を淘汰した後を担う。ロボットに手に負えないところは外国人労働者に任せる。バイオテクノロジーつまり遺伝子組み換えやクローン家畜、さらに最新の生命操作であるゲノム編集などの

生物工学を駆使して生命の持つ意味そのものを変える。そして土と土地ではなく工場生産としての農業をつくりあげる。ここには農民はいらない。土地と自然の制約から解放された農業は食の概念さえ変えていく。地産地消など意味を持たなくなる。

◆社会運動としての有機農業

日本の有機農業は1970年代初頭、社会運動のひとつとして動きだした。“殺す技術”としての農薬を軸とする現代農業技術体系に対し、土・微生物・自然を掲げて、大規模ではなく小規模、競争ではなく共生、効率ではなく循環を対抗軸として位置づけた。生産者と消費者という近代社会が生んだ分業を否定し、交換と価格決定についての別のやり方、考え方を具体的に作りだした。単なる考え方、思想ではなく、農業生産と農産物交換の場で具体的な行為として作りだしたところに、有機農業運動のすごさがあった。

「IT化」「生命操作」「工場化」が進む今、有機農業運動の意味はますます深くなっている。

第11回国際有機農業映画祭

テーマ：いのちを引きつぐ

日時：12月3日（日） 10：00開場～19：45閉会

会場：全電通労働会館ホール JR・地下鉄 御茶ノ水駅下車

参加費：前売り2000円/当日2500円 25歳以下：前売り500円/当日1000円

中学生以下無料（25歳以下、中学生は当日身分証を提示）

上映作品：

- ・未来の収穫（フランス）
- ・生きる伝える“水俣の子”の60年（日本）
- ・我々の土地は今（フランス）
- ・たね（アメリカ）
- ・ユーターン（ルーマニア）
- ・街を食べる（イギリス）

シンポジウム：「種って、おもしろい！」 石井恒司（百姓）ほか
有機のブース：有機農産物・加工品・関連書籍そして有機な人々

主催：国際有機農業映画祭運営委員会

定年退職

「益郎 定年退職しました！」なる集まりに参加しました。主催は本人の菅井益郎さん、新潟県は刈羽郡に生まれ、柏崎高校から東京の大学に進み、大学の先生になりました。無事定年を迎えるのを、お付き合いのあった皆様を招待して感謝をささげるといふパーティです。

彼は、1970年柏崎刈羽原子力発電所に対する「反対同盟」の結成にかかわり、地元で活動するかたわら、生活の場の東京で「柏崎原発に反対する在京者の会」を立ち上げました。東京に出てきている地元の若者との勉強会や、東電・政府への抗議活動などを展開していました。東京の生れ育ちの私が、ちょっと縁があって、地元の反対同盟にも在京者の会にも顔を出していたので、お招きをいただきました。

懐かしい反対同盟の面々、在京者の会の面々、懇談は大いに盛り上がりました。元京大助教の小出裕章さんとも立ち話。二次会でも反対同盟の面々とさらに盛り上がり、英気を養いました。

3・11より前の2004年と07年と続いた中越地方の地震で全面停止状態の柏崎刈羽原発。東電・政府は一部でも再稼動を模索中。が地元自治体は反対。原子力の危険性、東電の経営の脆弱性、見通しのない廃棄物の処理、有事の防衛、などなど原発の問題はご存知のとおり。原子力の未来は不安だらけ。

お孫さんもお連れした主催者菅井さんの気持ちはあずかり知らず、パーティーは柏崎刈羽原発を廃炉に追い込むための決起集会のようでした。とても昔を懐かしむ同窓会ではありません。

あらためて『じそん児孫のために原発を廃す』

山下茂



【少し長〜い編集後記】

前の「実験村通信」にTPP（環太平洋経済連携協定）の問題点を指摘していただいた記事を掲載しましたが、先日のアメリカ大統領選挙で「TPP離脱」を公言してきたドナルド・トランプ候補が当選したことで、その批准・発効が頓挫する可能性が強まっています。

もっとも、私たちがTPPに反対を唱えてきたのは日本の農業生産にとって脅威となることもさる事ながら、「非関税障壁の撤廃」とか「規制緩和」の口実で農産物や食料品の安全が脅かされることへの重大な懸念があるからでした。

これに対してトランプ次期大統領のTPP反対は、「アメリカの利益第一主義」の観点から「アメリカの得にならない自由貿易」には反対し、関税障壁を高くして「アメリカ産業の栄光を取り戻す」ためのワンステップであり、「食の安全」とか「環境保全」とは何の関係もない「経済利得至上主義」に過ぎません。もっとも「保護貿易と関税の強化がアメリカ産業を復活させる」なんて幻想は、いずれ雲散霧消してしまうに違いありません。

それでもTPPの頓挫は、農産物や食料品を「大量生産の工業製品」と全く同列に扱い、あらゆる地域的特性や歴史的背景を無視する「グローバリズム至上主義」の暴走を止める、大きな転機となる可能性があるのではないのでしょうか。(K)